

富山県の歴史

アイデンティティと興味の郷土史

2016.06.21 to

1. はじめに

富山県に住んでいる我らにとっては、富山の歴史については、日本の歴史とは違って何となく身近に感ずるためか、何でもかんでも何となく知ってみたいという気持ちになる。郷土の歴史とはそんなものなのであり、大なり小なりいろんな方々がかかわれるのが一番の魅力といえる。しかも、何かこだわりをもってピンポイントで迫っても歴史に何かしらの新しさを感じ、興味がわいてくる。

そう思っていると、自分の好きなポイントの歴史を地域におけるアイデンティティと捉えることにして、郷土史を自分にとってもっと身近なものにしたくなった。また、全国歴史そのものについては念頭には置くが、富山という地域で特徴的なことが即、アイデンティティにつながっていることを実感したくもなった。

そこで、こうした思いを叶えるために県域の変遷史として富山の歴史を書いてみることにした。また、全国に先駆けて富山を有名にした米騒動とイ病(タイタイ病)をも扱いますので、お付き合いをお願いいたします。

2. 個人周辺から郷土へ、自分中心史から郷土史へ

歴史については、むしろ身近な自分の街で小学校が新しくなったとか、ショッピングセンターができたとかいった事が何とんでも自分らの歴史である。郷土史は、多分にそんな自分たちの歴史の臭いのする歴史なのであろう。そうなると、ますます自分も郷土史に参加したいという気になるものである。

では、その源に何があるのでしょうか。それは行動圏・生活圏における生活の営みであることはいうまでもない。身の回りの皆さんの思いが積み重なって、総体として地域圏あるいは大きなコミュニティが時間という奥みをもって形成されていく。その全貌が結果としての郷土の歴史を育み刻んでいくのである。

3. 具体的展開

富山の自然は立山ということが出来る。では富山の歴史とはいわれると、すかさず真っ先に佐々成政や前田の殿様が上げられる。これは、関心や興味の歴史として、源平期、戦国乱世の佐々成政、近世の前田加賀藩時代が思い浮ぶからである。

一方、民衆の歴史として、立山信仰、越中米騒動、

イ病があり、文化の歴史として大伴家持がある。

古代から中世・近代の順に展望していこう。

2.1 古代 7-8世紀

<a> 県域

まずは、富山が歴史的にいつ登場するのか。これは律令制の時代になって初めてではなかろうか。都人にとっては、北陸は北の果てであり、立山連峰が果ての象徴であったのである。そんな時代から展望したい。

大化の改新(645年)の頃、高志(こし)の国といわれていた北陸一帯は、いまでいう福井敦賀から石川、富山、新潟、山形庄内地方までの領域である。当時は陸路よりも海路が盛んであり、このため北陸の北限については弥彦山あたりとすることもあったという。

8世紀以降には、高志の国は、越前、越中、能登、越後に分割され、高志の国が越の国と書かれるようになった。(呼び方は「こし」のくに) また、越中は、757年に魚沼や頸城が越後に移され、今のスマートな越中におさまった。(図4参照)

ちなみに、高志や越のいわれについては、都から山をこえてきた国ということで「こし」が当て字で高志になり、越になったという説がある。詳しいことは分からない。

ところで今でも、福井、石川、富山、新潟がなぜ北陸ですかとよく聞かれる。昔は、北に及ぶ権力域が高志の国までであったので、都からすると、そこらの地は北の果てとして北陸といわれたという解釈を今でも使わせていただいている。

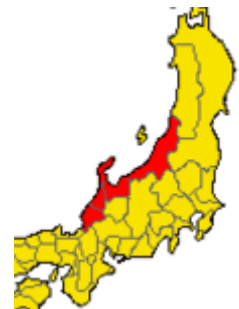


図1 越の国 HPより

 立山開山

佐伯有頼が立山を702年に開山したという。開山には諸説あり、実存した親の有若ではないのか、佐伯一族ではないのかともいわれている。

それはさておき、県内ではもちろん有頼が歴史上の重要人物として立山信仰の創始者として祭り上げられている。また、立山信仰の布教で、曼荼羅絵の果たした役割は大きい。



写真1 曼荼羅 立山博物館 HP より

<> 大伴家持

古代の著名人といえば大伴家持であり、富山の文化性を持ち上げるには一役でも二役でもかかっている。

歌人大伴家持は 746 年(平安時代)に越中国司として国府(今の高岡市伏木)に赴任し 5 年ほど越中に居していた。在任中、家持にはお気に入りの場所が

- ・二上山(高岡の山。奈良にもある)、
- ・布施の海(氷見平野、当時は海であった)、
- ・立山

の三か所であり、これらの場所にて越中の和歌を多数(223 首)詠んだ。特に、立山を詠んだ歌が有名である。ただし、富山の雪にはうんざりしていて、そのせいか、海越しの立山には興味示さないばかりか、立山の懐近く県東部には足を踏み入れなかったらしい(詳細不明)。県東部での歌は旅人から東部の様子を聞いて詠んだともいわれている。

立山の和歌については、以下に列举する。

立山に ふり置ける雪を 常夏 [とこなつ] に
見れども飽かず 神 [かむ] からならし
片貝の川の瀬清く行く水の
絶ゆることなくあり通ひ見む
たち山の雪しくらしもはひつきの
河のわたり瀬あふみつかすも



写真2 雨晴らし海岸と立山連峰 野末氏より

2.2 木曾義仲

木曾義仲は倶利伽羅峠で平家軍を敗退させたという

ことで有名であるが、県内ではさほど義仲云々は語られてはいない。理由は簡単である。越中にはまったく住んでいなかった人であり、県西部域にある主戦場「倶利伽羅」において源平が戦をした通りすがりの人というのが義仲の評価である。(評価を下げてはいない)

そのためか、県内では、義仲が行軍したルートが人知れず伝聞として残っている(にすぎない)。

弓の清水の伝聞地では、義仲の軍が越中西部を行軍していたとき、兵士がのどの渇きを訴えたので、義仲が地面に弓をひいて矢を射ったところ、水が湧いたという。どういう訳か、この地が史跡に指定されている。

最近、地元の研究者により、そのような場所を義仲が行軍していないことが実証されたが、高岡市はかたくなに史跡解除を拒んでいるという。理由は、「真実はどうでもよく、観光資源が減る」ということなのか。



図2 木曾義仲行軍経路 HP より

2.3 佐々成政の時期 1580-1585

近世では、越中は一向一揆の時代や上杉統治の時代を経て、織田政権の武将として佐々成政が越中に入り、上杉勢を退けて領国経営にのりだした。とにかく、県内初の戦国大名として越中に居を構えて住み、越中に尽くしたことが評価されている。また、地道な統治の成果として治水事業が有名であり、神通川の佐々堤を築いたことが後世に伝えられている。このことからしても、県内では佐々の人気は前田の殿様よりも結構高いといえる。

なお、佐々は秀吉に攻められたとき、厳寒期に浜松の徳川に援軍要請のため、北アルプスさらさら峠を越えたことが一層名前を県民の記憶に残したといえる。



写真3 さらさら峠 佐々HP より

2.4 前田の富山藩、1585-1871

佐々成政以降、越中は前田の領国となり、1639 年には、射水郡と新川郡の一部が富山藩となった。前田利次が初代藩主に就任し、新田開発もすすめ加賀藩を支えていた。富山県域にあたる領域(富山藩、射水、砺波、新川)では、40 万石は越中といわれている。

江戸時代、県西部は加賀藩であったので、加賀の武家文化が県西部では華やいでいた。しかし、県東部は、加賀藩でありながら、文化とは無縁の世界であった。理由はおそらく、加賀の文化が富山藩に遠慮して県東部越をしなかったためと、県東部が文化でなく米蔵であれば十分とされたためであろう。このため、富山県西部にある高岡、伏木、射水、岩瀬、砺波では絢爛豪華なお祭りが多いのに、県東部では華やか祭りは全くないのである。

富山藩はそんな貧乏所帯の藩であり、上述のように文化の香りのないことが特徴的であった。なぜそうだったのか。また富山藩が本来なら新川を含めて神通川以東すべてを富山藩にすべきところを、なぜ神通川と常願寺川の間だけの領域であったのか。これは、幕府の手前ある程度分藩としての体裁が必要とはいえ、分家筋には母屋(加賀藩)は割合冷たく対応し、下記二点の大事なところは手放さなかった、とみるべきであろう。

- ・新川域の米生産は魅力であったので、母屋はこれを手放さなかった。
- ・東端の防衛拠点として境関所を母屋直轄していたが、太平の世ではかえって財政的負担大となっても体面が必要だったのでであろう。また、立山以東も防衛拠点として母屋直轄としていた。

このようにして、富山藩はこじんまりと富山中心に限定された狭い領域になったのであろう。

しかしながら、富山藩は、諸産業として薬産業に目をつけ、これを奨励し、とりわけ全国に商う売薬を制度化させた。今日、富山が県の中心(県庁所在地)になっているのも、富山が貧乏であったからこそ産業振興に目を向けられたのではなかろうか。そのような富山が後年、高岡を押しつけて県庁所在地になってからは、富山の発展ぶりはそれこそ特筆すべきことである。

なお、参考までに加賀藩の石高について記しておく。関ヶ原後 1639 年までは、加賀は 120 万石であり、能登 23.3 万石 越中 55.3 万石、北加賀 26.6 万石、加賀

西部 12.5 万石となっていた。1639 年には、大聖寺藩 7 万石、富山藩 10 万石が独立して、加賀藩本体は 103 万石となった。



写真4 富山城 前田富山藩 HP より

2.4 米騒動 1918

富山県では、明治期、米商人が富山の安いコメを買

い占め、県外で高く売って巨利を得ていた。1918年(大正7年)政府のシベリア出兵を機にコメの投機的買い占めが始まり、米価が高騰した。日頃の米価高騰に苦しめられていた魚津の主婦たちが港に停泊の米運搬船へのコメ積み出しを阻止した。これがたちまちのうちに全国に知れわたり、各地で民衆が蜂起したが、軍隊によりすべての騒動が鎮圧された。

民衆の大抗議運動として特筆すべきこの騒動は、県内ではあまり触れられてはいない。単なる一事件という捉え方しかされていない。



写真5 米騒動時の再建米蔵 HP より

2.5 イタイイタイ病 (イ病) 1910-1970

(1) イ病

イ病は、神通川下流域の富山市婦中町で 1910 年から 1970 年まで、特に女性に発症した公害病である。症状は、骨がもろくなって折れるものであり、想像を絶する痛みを伴う。患者数は、200-400 人くらいといわれているが、過去からも含めて実数は不明という。

イ病の原因は神通川上流にある三井金属神岡精錬所から出る亜鉛精錬の未処理排水に含まれているカドミウムである。これが農業用水や飲用水として使っていた農民の体に取り込まれ蓄積することにより腎臓障害を引き起こし、体内の骨量が減少するのである。

イ病について、原因が判明し、患者救済や再発防止へと世の中が動き出したのは、1955 年からである。すなわち、1955 年に地元の萩野医師がイ病を発表し、1957 年に鉍毒病として指摘して以来、問題解決に向けて運動が始まった。初めのころは栄養失調とか、風土病とかでカドミウム原因をなんとかやむやにしようという勢力もあったが、1966 年にはイタイイタイ病対策協議会が発足し、粘り強い調査研究・運動もあって、1968 年には厚生省は「イタイイタイ病はカドミウムの慢性中毒による骨軟化症であり、カドミウムは神通川上流の神岡鉍業所の事業活動によって排出されたものである」と断定した。

その後、すぐに文芸春秋誌を使った巻き返しのキャンペーンが始まり、長い裁判闘争がくりひろげられた。詳しくは、関係の文献を参考にされたい。

最終的には、2013 年 12 月に全面解決として合意書を原告と被告の間で取り交わした。ただし、これですべてが終わったわけではなく、行政はいまだに公害病認定にハードルを上げており、三井金属はいまだに神岡鉍山に残留する廃棄物を未処理のままにしていることなど、問題はいまなお多く残っている。

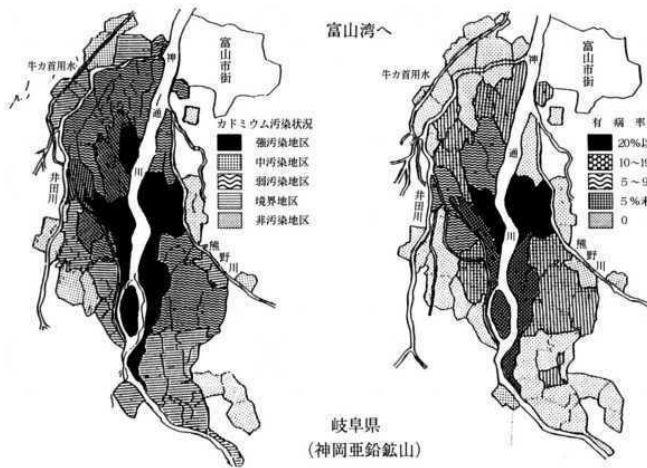


写真3 カドミウム汚染域
20km*6km 程の範囲 (伊病のHPより)

(2) 汚染地域対策

住民側のパワーが力を増してきて、汚染地域は行政側で土地改良によって汚染程度を低下させることになった。県は、1974年から農用地汚染防止法により農地863haを対象として土壌改良を検討し、1979年の本格工事を開始し(33年かけて)2012年にやっと完了した。総費用は407億円であり、これを三井金属、国、県が分担した。

(3) 今

イ病への対応について富山県は、上記土地改良工事の推進と後世に負の遺産として伝えるイ病記念館をオープンさせたが、問題は今なお残っている。ひとつには、改良工事は一応終わったことになっているが、未改良地域は大ショッピングセンターや公園として今なお手をつけず残しており、ここにも行政が工事費を浮かせようと思案した名残を見ることができる。第二には、資料館において県が鉍毒説を否定し、患者を著しく危険にさらしたことを少しも展示していない。行政は誰の味方であるかが如実に見て取れるしだいである。といった指摘を含めて、イ病を語り継ぐ会は、いまなお行政には真摯な対応を求めている。

3. 富山県域の変遷

富山県は東西南の三方向で山に囲まれており、県域は自然と地形に沿ったものになるはずではあったが、政治の力関係で、石川域と富山域とで境界線が何回も線引きしなおされた。1876年には、富山域を含めて石川県の領域が定まった。しかし、石川側と富山側とは行政の主事業が異なっており、石川の道路整備に対して富山の治水事業を優先していたので、富山側の独立が強く叫ばれ、1883年に富山県が石川県から分離して(富山県が誕生し)今日に至っている。

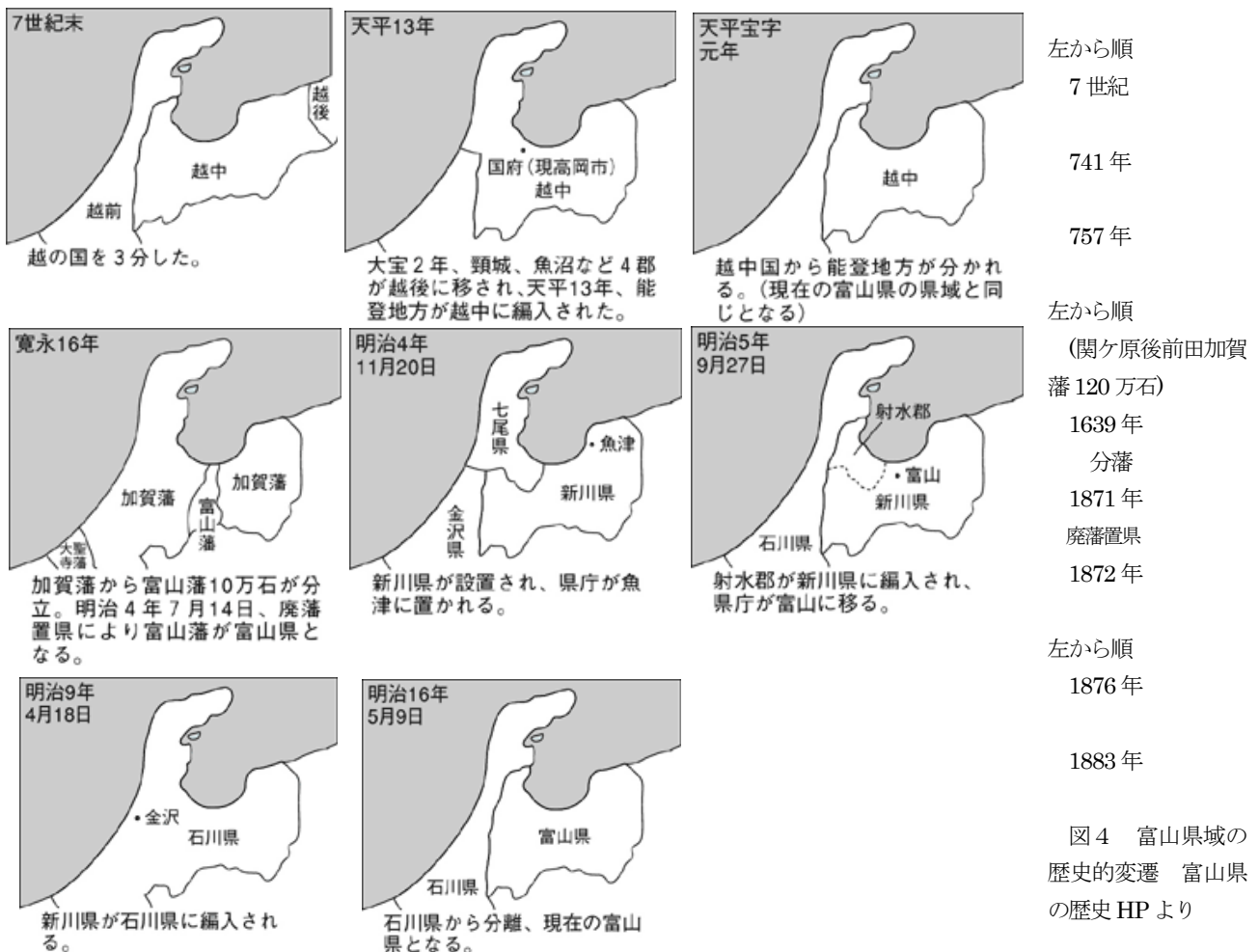


図4 富山県域の歴史的変遷 富山県の歴史HPより

1889年(明治22)には、市制・町村制が実施され、富山町と高岡町が市となり、2市31町238村となった。

戦後(1945年)にはいつてからは、戦災復興院告示第一号により都市計画事業がすすめられた。その後、市町村については、昭和の大合併で9市18町8村(総計35市町村)となった。

2004年(平成16年)には砺波地方に2つの市が誕生し、10市13町4村(27市町村)となった。

4. まとめ

郷土に関心があつて、何となく自分でストーリーを構成したくなり、富山県の歴史としてまとめてみた。このため、本稿は一般の歴史書とはかなり違って特徴的な様相となった。列挙すると;

- (1) 県全体の通史ではなく、県民の歴史人気と住民の苦難について書き記すことができた。
- (2) 県民の関心を自然と発掘したおかげで、興味がさらなる興味を引き出すようなイメージを作り出すことができた。
- (3) (一部の事象だけだが)県民の関心はやはり歴史上の人物そのもの。読者が人物と重なると、しらないうちにアイデンティティを堪能したことになると考える。

読者の皆さん、いかがでしたでしょうか。本稿から県民の様々な声が聴けたのでは、と思う次第です。

最後までお読みいただきましてありがとうございます。

A. あとがき

富山の歴史を扱った本は、本当に沢山出版されている。それだけに、歴史に寄せる思いは皆さん、強いといえることができる。

かくいう自分も歴史ファンである。かなり知識がたまってきたので、何か書きたくなってきた。しかしながら、単に富山の歴史というのでは、いかにも歴史を勉強してまとめましたってことになるもので、おもしろくない、

そこで考えたのが、「歴史は何のために歴史か」という視点でもって歴史を語ることにした。皆さん、歴史を何のために知るかといえば、郷土のアイデンティティを知るためとか、人間の営みの積み重ねを知るためということである。(時には負の歴史も)

本稿はそうしてまとめたものである。単なる歴史書とは違って、一味も二味もあること間違いないといいたいのである。

歴史は、そんな観点に立てば、いろんな対象で歴史を語るができる。誰でもが語れる、それが歴史なのである。

<追記2>富山県の歴史に詳しい方、敬称略
荻原大輔; 戦国の政治・社会; 富山市郷土博物館
竹島慎二; 近代史; 富山近代史研究会
向井嘉之; ジャーナリズム; 米騒動、イ病、他
イ病を語り継ぐ会、他
鈴木圭二: 日本史; 富山大学文学部日本史
久保尚文: 日本史; 大山歴史民俗研究会
福江充 : 日本史; 北陸大学
新谷秀夫: 万葉文学; 高岡万葉歴史館学芸員

<追記3>

最後に、なぜ執筆か、今一度理屈を述べたい。

世の中に多くの本が出ていても、自分で歴史を勉強していくと、何となく(歴史を通して参加したくなり)まとめてみたくなる。実際にまとめたすと、何か自分らしさを出しながら編集したくなってくるから不思議なものである。そんな思いをもって執筆した。なお、取材は北アソグを中心とした。

<追記4> 感想

本冊子を何人かの友人にお見せしたところ、感想をいただいたので、ここに紹介する。

(1) 越の国はなぜ越なのかの議論について;

(朝鮮から)海を越えての越ではないのか。

これを聞いて編者の見解として、当時、海路が主でしたから、これまた敦賀の方から海を越えての感覚があったのかもしれない。

(2) 歴史「history」を「his-story」としてではなく「my-story」として。編者はこれにうなずきました。

(3) 専門的な指摘もあった。

・もともとは越だったのが、奈良時代の前半、地名を2字で表現する習慣・命令によって、高志という表現が現れたということでは、越→高志→越というのでは。編者、これにはびっくり。

・家持が県東部に踏み入れなかったという根拠はなく、分からないというべき。編者は歌の調子などから推量で踏み込まなかったろうといわれているだけと。

・義仲軍の主力であった信濃衆に比べて少数とはいえ、越中国人の活躍がある。越中で義仲の活躍が伝わっていないのは、安徳四年(1371)の長沢合戦で越中国人が完膚なきまで打ち破られて追放され、地元の古文書類も失われ、人的にも文字的にも、越中から義仲にかかわるものが失われてしまったから。編者はうなずく。

(4) 県東部には義仲を祭る八幡社が多いと聞く。義仲の影響力は結構あったのでは。これに対して編者は統治したのとしていないのでは知名度がちがうとしている。今一つ例として、戦国期に上杉が県東部まで侵攻したが、我らの上杉観は、侵攻で一時期支配していた上杉ではなく、あくまでも越後の上杉である。